

アナログ再構成後の活用(50)  
ーベートーベンを聴く(49)ー

1. 始めに

前報(49)に引き続き、ベートーベンのアナログ盤を試聴していきます。

2. アナログシステムについての改善の試聴方法

試聴は LINN LP-12 のシステムでアクセサリ関係も最新情報に基づいて実施し、要時 Garrad 401 のシステムも加えます。これまでの状況は、オーディオ資料室の再生経路と変更点 4 に要約しています。なお、バイワイアリングのスピーカーケーブルにケーブルチューナーが装着されています。さらに、追加の変更点については、オーディオ資料室の再生経路と変更点 5 とオーディオ資料室の再生経路と変更点 6 に要約しています。

再生経路は、LP-12 のアームの調整も終わりましたので、次のとおりです。

LP-12→AACU-1000→Stage1030→Brooklyn DAC+→AACU-1000→

P&G フェーダー→300B シングルアンプ

今回も引き続き、ベートーベンの交響曲を聴いていきます。

今回取り上げる盤は、次のアナログ盤です。

日本コロムビア OC-7131-BS

交響曲第 9 番ニ短調作品 125「合唱」

ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮ウィーンフィル

3. アナログシステムについての改善結果の試聴結果

1953 年録音のモノラルでのライブ録音です。

ベートーベンの第 9 と言えば、フルトヴェングラーです。モノラル録音で盤質もよくなく、また、ダイナミックレンジも抑えられ、*f*レンジも広くはありませんが、特に終楽章のソリストの声など、意外に生々しく聴こえます。

そういった環境の中からベートーベンの解釈はこうだと言わんばかりのフルトヴェングラーの演奏です。

4. まとめ

アナログシステムの再構成の結果、モノラル録音ながら定番のフルトヴェングラーのベートーベンの第 9 の迫力を聴かせてくれるようになりました。

以上